

## 「統制經濟特輯號」のための序文

こゝに我々が「統制經濟特輯號」を編輯する所以は、我々の常に思つてゐた一つの意圖の一端をも實現せんがためのものである。

今大學とその學問は、日本と共に轉換點に立つてゐる。舊き因習に代つて、新しい理性の支配が大學に於ても要求されてゐる。その理性とは、生れ出んとしつゝある、新しい日本が行くべき道を、我々は我々の學問の世界で見出さうといふ、さういふ要求に適つた理性である。

我々の場合、かういふ學問への要求は、未だ多分に情感的なものであるかも知れない。その論理的なものへの高揚と純化には、嶮しい學問の道が途上に尙無限に續いてゐるのだから。しかし我は、このパトス的なものを今我々の心と身體の總てに感じつゝある。そしてそれを學問の世界への情熱に迄高めようとしつゝある。蓋し、このパトス的なものこそ、すべての生ける學問の生みの親だつたのだから。それはブルジョアの自由の情感としてイギリス古典學派に結晶し、凡てに勝るドイツの感激としてドイツ歴史學派を生み出したものであつた。

かういふ方向を歩まんとする我々の第一歩として、「統制經濟」を特輯することは意義が深い。それは第一に、「統制經濟」といふ問題が、新日本建設の、從つて又新しい大學の學問の對象の、基幹的な

ものゝ一つであるといふ意味で。第二に、略々同じ方向を採らうとする同人が、「特輯號」に協働したといふ意味で。これからの國家と社會の組織が協同體ガイジンシャフト的なものをその一基調として内包すべき以上、學問も亦今までの様な個人的英雄主義に立脚すべきではないのだから、こゝに我々同人の協同研究による特輯號が出来上つたといふことは、その取扱ふ主題の如何を離れても、たしかに我々にとつては一つの劃期なのである。

といつても、この特輯號が、我々の意圖の完全な代辯者になり得てゐるといふのでは決してない。もとよりこゝには、清算さるべき幾多の夾雜物が殘存し、又協同の實が必ずしも十分にはあらはれてゐない。かういふ意味で、我々の自己批判は、正に將來の課題であり、この特輯號は批判のための一素材でさへある。

がともかくも我々は一つの目的を持ち、その一半をこゝに實現した。理解ある御叱正を獲れば幸ひである。

田 邊 忠 男